

池田満寿夫
親しい友への手紙



FLUGPOST
AIR MAIL

ハルシウ

情熱溢れる21通の手紙！

いま、ぼくは原点に
もどっているのだと思います、
仕事においても、生活においても、
そして愛においても……。

新潮社版*価920円

池田満寿夫
しい友への手紙

新潮社



親したしい友ともへの手紙てがみ



一九八〇年四月一日 印刷

一九八〇年四月五日 発行

著者・池田満寿夫（いけだ・ますお）

発行者・佐藤亮一

発行者・株式会社新潮社

郵便番号 162

東京都新宿区矢来町7-1

03(266)業務5111編集5411

振替・東京41808

印刷所・二光印刷株式会社

製本所・大口製本株式会社

定価・九二〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

親しい友への手紙 ■ 目次



7 6 5 4 3 2 1

加藤周一宛 ……この手紙の返事はいりませんよ。なにしろ目的もなく好き勝手なことを書こうというのですから。 7

東野芳明宛 ……批評と好き嫌いは分離すべきであるというのがあなたの持論でもあります、やはりぼくは個人の嗜好を最優先させます。 17

沢沢龍彦宛 ……ほら、あなたもよく知っているとありますが、どんなシュールリアリズムの本にも出ている有名な写真がありますね。 27

西脇順三郎宛 ……ローマは三度目です。十年以上もヨーロッパに行っていないかったので、今度の旅行は見るもの総てが新鮮に写りました。 37

吉田秀和宛 ……ぼくには数秒間の動きを完全に観察し再現してみせる能力が極度に欠けているようです。 47

海上雅臣宛 ……世間ではぼくが棟方志功について語ると奇異な感じを持つ人々が沢山いると思います。 57

朝倉響子宛 ……ぼくの印象派嫌いの根底はどうも写生を蔑視したところからはじまったようです。 67

8 飯田善国宛 ……君は昔から重戦車で、ぼくは昔から軽機関銃だった。その関係は今でもたいして変っていないようだね。

9 青木治男宛 ……大袈裟に言えば、この映画に関しては総てが大きな賭なのです。信ずることが出来るのは自分のカンでしかありません。

10 佐藤陽子宛 ……そうそう、あなたの歌う唄にぼくが作詞する計画がありましたね。忘れているわけではありませんよ。

11 野田哲也宛 ……ぼくの本質は表現主義にあると信じているのですが、いつの間にか予想もなかった地点まで来てしまいました。

12 西脇順三郎宛 ……ぼくはうっかりマチスがセザンヌから受け継いでいたものを見逃していたのです。

13 バーバラ・クラフト・吉田宛 ……「あら、池田さんって版画もするんですか」とぼく自身聞かれたことがしばしばあります。

14 渋沢龍彦宛 ……何故小説を書くか？ それは小説としての一つの形式に興味があり、ぼくの様式をつくりたいからに他なりません。

15 堀田善衛宛 ……かねがねぼくは芸術家は犯罪者の心を同時に持っていると考えていました。

145

16 加藤周一宛 ……カンヌでは、自分の映画を観ただけで、他のものは一本も観ませんでした。このくらいのエゴイズムは可愛いものだと思いますよ。

155

17 勝井三雄宛 ……ぼくも含めて、日本人はあるいは日本通の外国人は、何故こうも伝統の注釈ばかりしたがるのか不思議でなりません。

165

18 奈良原一高宛 ……素人のぼくが映画に引き続き今度はあなたの領分を侵そうというわけです。

175

19 川島猛宛 ……これは決してぼくの弁解ではありません。つきつめていくと、相互の愛し方の問題になるでしょう。

185

20 佐藤陽子宛 ……ダラスに来ているおかげで、割りあい落ち着いて、明日から起る離別のドラマを想い浮べています。

193

21 X宛 ……様々な意味で、生活に於ても、仕事に於ても、愛に於ても、自分は今、原点にもどっているのだと思っています。

203

親しい友への手紙

装幀・カット／著者

1

加藤周一宛



親愛なる加藤周一様

この「藝術新潮」の連載はどのような内容と形式にしようかと、さんざ考えたたり迷ったりしたあげく、日本にいる友人達への手紙の形式を借りて、ごく気楽にやっつけていこうときめました。もらう方は突然の手紙で驚くでしょうね。なにしろ近來は事務的な打ち合せの手紙を編集者に出すだけで、友人たちにはさっぱり音無しのかまえをきめ込んでいますから。平常のご無沙汰を解消するためにも、と言っても長続きするかどうかそう自慢も出来ませんが、自分では割り合いうまい考え方だと気に入っています。

まず手はじめに加藤さんに出すことにしました。というのは、前にニューヨークにおられた時、日本人はあまり手紙を出し合わないと言っていたことを思い出したからです。ほく自身を含めて友人たちも忙しすぎるからでしょう。それに電話が普及して、日本国内にいる時はたいていの用件は電話ですませてしまう場合が多くなったからだとも言えます。その点外国にいる

と、そうそう国際電話で無駄話も出来ないので、日本にいる時よりは確かに手紙のやり取りは増えていますが、なんの用事もなく唯相手のご機嫌をうかがうとか、近況をちょっと報告するとかの手紙は、友だちの間でも一年に数通ぐらいしかありません。手紙というやつは自分で出さなくせに相手から来ることばかりを待っているようなところがありますね。最近は友人・知人に本を送っても礼状はめつたに來ません。もつともほくだつて本の礼状をほとんど出さないのですから文句は言えないところです。この手紙の返事はいりませんよ。なにしろ目的もなく好き勝手なことを書くというのですから。

先日郵便局の私書箱に郵便物をとりに行ったら一通も入っていなかったので、カウンターに行つて、そちらで保管してあるかどうか聞いたのです。顔見知りの係りは保管していないと言います。おかしいな、そんなはずないよと言つと、その男は仕方ナイジャナイカ、ノーボディ・ラヴ・ユーさ、と言つたものです。誰れもお前のことを愛していないからさ、と言つわけですが、郵便局でのこんな冗談はとてもアメリカの田舎的ではくは氣に入っています。我家でもリランに一通の手紙も來ない時は、彼女はきまつて、ノーボディ・ラヴ・ミーと言つて不服そうな顔をするのです。ほくも面白がつて、そうさ、誰れもお前さんを愛していないよ、といいながら、自分あての手紙を得意氣に読むことにしています。

青山でお会いした翌日羽田を発ちました。今度の滞在は丁度四週間でしたが、伊勢丹での全版画作品展と芥川賞の余韻がまだ残っていて、そうとう覚悟はしていたつもりでも、結局疲労困憊という結果になりました。それでも全版画作品展の方はなんとか無事に終了し、肩の荷を降すことは降しました。

いったいこれで何回目の回顧展をしたことになるでしょうか？ 驚いたことは、同じ頃都内だけでも数個所で池田満寿夫名品展とか、知られざる名作展とかがまったくほくとは無関係に開かれていたことです。自分の展覧会でさえ、自分自身のあずかり知らぬところで開催されているのです。勿論それらのどの一つにでも行って見ませんでした。気恥しさが先に立つのです。それにどんな作品が展示してあるのか不安で、そうかといってわざわざ出掛けて行って確認する勇氣もわいて来ません。同じ頃知人の一人から京都でほくの個展を見て来たとも言われました。入場料まで取っていたそうですが、この方もほくには寝耳に水でした。いったいどういうことになっているのか、とあきれているところです。でも抗議は申し込みませんでした。そうしたことにいちいちカッカしている暇がないからですが、本人のまったく知らない個展はもうずつと前から、あっちこちで開催されていたのです。問題はそうした個展がいちいちほくの承認を得ている、つまり作者の意図で行われているものではない、という点をあなたに知って

おいてもらいたいのです。多分一般の人々はどんな種類の個展でも作者の意思にもとづいていると信じているに違いありません。個展の内容がよければかまわないのですが、たとえばBクラスかCクラスの作品だけを集められて、「名作展」などとやられると、あまり有難くはありませんよ。

自分が制作し、自分がいったん発表なり刊行なりしてしまった作品は、勿論どんなまずい作品でも作者が責任をおわなければならぬでしょう。いったん世に出してしまったものは、あとになっていくら自分で見たくないと思っても、版画は複数ですので、いちいち追跡して取りもどすわけにはいかないのです。そうです、自分の作品のなかにも嫌いなものや感心できないものがあることは事実です。ところが世の中皮肉なもので、いやな作品ほど市場に出まわっている場合が多いんですね。代表作はめったに出て来ません。ところが、自分では厭だと思っている作品でも、結構いいと思っている人もいますので、ややこしくなります。場合によっては、一枚しか刷っていない失敗作の方が、一枚しか刷られていないという稀少価値だけでむしろ尊重されるようなところもあるのです。コレクターの方でも、なにかの間違いで作者の失敗作が世に出てしまい、それを偶然手に入れたりすると、たちまちのうち宝物に変身するんですね。まあ全版画作品展はいわば作者の開き直りみたいな気分がありました。見られたくないものまで

全部公開することで、みなさんどうにでも料理して下さい、ぼくにはこんなにマズイ作品もあるんですよ、とお尻をまくって見せたわけです。

いろいろな反響がありました。人それぞれに二十年間の作品のピークの見方が違うんですね。六〇年代をピークとする人達が意外に多かったことも確かです。七〇年代の方が理解し易いという人達もかなりいました。それで、いったい次はどんな仕事をするのですか、とよく聞かれました。ぼく自身、この二十年展で一つのサイクルは終わったと、早々に宣言しておいたからです。大体この種の回顧展なり、作家なら全集なりを刊行したあとは、ガックリくるものです。大回顧展のあとポックリ死んでしまった画家、マグリット、ジャコメッティ、エルンスト、カルダーがそうですが、そんな例もあるので、特に老齢の画家たちは回顧展をいやがります。テ・クレーニングなどは何回も断り続け、とうとうやらされてしまった類ですが、近来はアメリカでも若手の回顧展がふえ、ウォーホールにしてもリバーバスにしても、リヒテンシュタインにしても、回顧展のあとはどうもあまりぱっとした仕事はしていない様子です。回顧展という奴、はたで見るとは作者にとっては華々しさよりも、なにか苦汁を飲まされる気持の方が強いようです。大いなる名誉には違いありませんが、これで引退するのなら有終の美で、本人はゴルフでも楽しんでいけばいいわけです。ところが画家とか作家とかは、引退宣言は出来ないことに

なっていますね。いつの間にか忘れられるのを待つか、忘れられても自分の仕事にかじりついているか、どんなに仕事をしていても忘れられてしまうか、のどれかに堪えねばなりません。芸術家にとって過去の名声はなんの役にも慰めにもなりません。屈辱感を培養させるだけでしよう。自分が仕事を続けている限り、いつも現在があるのみだからです。現在進行しつつある仕事から比べれば、過去の業績は多少社会的信用を保証する役にはたっても、創造そのものには役に立ちません。まあ、その程度の事情は了解しているつもりです。だから回顧展に対してはほくは幻想を抱かないのです。

みんなよくあれだけの量をやったものだと感じてくれました。しかしほく自身では数量については別に驚くべきことだとは思っていません。二十年間、あのなかで版画家としていったい自分はなにをやるうとして来たのか、なにをなしとげたのか、が問題です。青山のスペイン料理店でもお話ししましたが、加藤さんが村上龍との対談で「池田君のエッセイは本当に困難な問題にぶつかると巧みに回避しているのではないか。」と言われたことについてまさにその通りだと反省しているのです。その性格は、エッセイだけではなく、ほくの創造にかかわる総てに言えるとしたら、これは大変な問題だなと考えざるを得ません。版画はそうではない、と慰めてくれましたけど、ほく自身ではひょっとしたら、そうかもしれないと思うところがあるの